

宇部インターハイと山口国体

元豊浦高校監督 渡辺 一平

第15回インターハイを宇都に誘致するため、昭和35年柏村勝先生（故人）と上京し、関東の各県バスケットボール専門委員長を訪問した。その甲斐があって宇部開催が決定した。地元の準備を進めるとともに、昭和36年第14回インターハイに青森へ柏村先生（高体連）、水嶋先生（県協会審判長）他審判関係者数名が審判研修に参加した。宇部市からも教育長が視察に行かれた。

当時、柏村先生は宇部商高に勤務で、昭和38年開催予定の第18回山口国体の運営にも役立つものであった。しかし、昭和37年4月教職員異動で大変なことが起こった。柏村先生が新設の美祢工高に転勤することになったのだ。それも、私が宇部工高に転勤するので、バスケットのことは心配しなくてもよいとの説得があったそうで、宇部工高の小林先生も小野田高に転勤の準備をしていたと言う。私には何の話もなく、後日このことを知らされた。

宇部のバスケット関係者も大慌てで、上野学先生（当時宇部女子高）を柏村先生の代わりに立てて対処した。高体連も布施先生（当時下松工高）が専門委員長として事務を受け継ぎどうにかつじつまを合わせた。布施先生はポケットマネーを相当使われたと聞いている。

私は豊浦高の宇部インターハイ出場から大会運営等、当時は車も持たずにどの様に動いたのか記憶にない。

一方、翌年の山口国体はよく練習した覚えがある。

春季県体で宇部商を破り、優勝して強化費をいただいたので、7月上旬のインターハイ予選兼国体予選に備えて、はじめて長府中学校の体育館を借用し、5日間の合宿練習に入った。第一目標は正規コートに馴れることであり、朝6時より7時30分までシュートを主体に練習をすませ、午後は5時より7時30分まで走ることを主体に練習した。その効あってか大会では4戦全勝し出場が決定した。授業を受けながらしかも試合前の合宿練習ははじめてで効果については自信はなかったが、結果からみて無駄な動きも少なくなったし、シュートのタイミングも良かったし、効果的であったようだ。この例にならいインターハイに向けて、長期休暇中の5日間の合宿練習は試合に馴れることを目標に先輩との練習試合を多く持つことにしたが、休暇中の学生しか集まれず、その上大学で活躍している人々が自校の合宿に帰ったため十分にできず、暑さと練習時間の延長のため体力の消耗がはげしく、試合前には良くなかったようである。

県内大会では、第1回戦、2回戦と調子が出ず苦戦するのが例で、インターハイでも第1戦は勝てる相手でありながら全く不調で、投げるシュートはほとんど入らず、意外な敗北に終わった。これまでの過重な練習スケジュールの無理にあわせ、新潟の意外の暑さ、それに分散、民泊等で心身共最悪の調子であった。しかしこのような結果に終わるとは夢にも思わな

かった。このショックは3年生8名を中心にするチームだけに大きかった。

国体には汚名を返上しようとお互いに励ましあったものの調子が出ず、毎日ユニフォームに着換えて一緒に練習した。気力を取り戻したのは8月下旬であった。夏休中は市内中学校体育館を借り歩いた。10月に入り市営体育館での練習の便宜をはかっていただき、大変幸せた。その間、副知事、総務部長、県連合婦人会長等の直接の激励にあい、選手一同奮起し、短時間ではあったが全精力をつぎ込んだ。9月下旬、関東代表中大附属と対戦が決定した。中大は長身揃いであるので、全コートを使用しての対戦しか方法は無いと考え、練習目標をファーストブレイクとプレスディフェンスにしぼり集中練習をした。正規の体育館でのプレスディフェンスに馴れたのは10月の中旬であり、10月20日にはこれを試すために国体九州代表佐賀高校に遠征した。第1戦は96対65で惜敗したが、第2戦には動きの連絡も良くとれて70対67で雪辱した。幾分できる自信がもてた。

最後の仕上げが体育館の無い自校では出来ないなので、24日より防府で合宿に入り、29日の試合当日まで練習を続けた。コンディションは実に良かった。試合は終始自己ペースで運べたが、第2クォーターのシュートミスが最後までたたり、その上、長身(181cm)谷口選手をおさえきれず30数点を許し、49対69で敗れた。中大は優勝した。しかし負けはしたが平均身長5cm以上の差はあっても相当苦しめたことは事実で、国体のための強化練習が非常な効果を収めたと思っている。

※山口県バスケットボール協会60周年記念誌「夢を追う」(平成19年2月発行)から抜粋